

保育者のピアノ実技に関する実際

安田 万里子¹⁾

Practical Aspects of Using Piano Skills by Teachers in Nursery and Kindergarten Schools

Mariko YASUDA

「ピアノ実技」の授業での取り組みを考える上で、保育現場におけるピアノ実技に関する実態を把握するとともに、学生の間にもどのような力をつけておくことが保育現場で活きるのか、保育現場では具体的にどのような力が必要になるのか、を明らかにしたいと考えた。保育者として勤務している、本学子ども学部卒業生を対象に郵送による質問紙調査を実施した。結果から、今現在ピアノを弾く機会のある保育者の多くが、ほぼ毎日、1日に3曲以上弾いていることがわかった。①ピアノの技術・知識、②ピアノの演奏、③ピアノのその他の面、に関することをそれぞれ9項目挙げ、保育をする上でどの程度必要であるかを回答してもらったところ「とても必要」「ある程度必要」の割合が高い項目が多かった。保育者にとって、ピアノ実技の多岐にわたる事柄が必要となることが明らかとなった。同時に、必要性を感じながら実践できていない保育者が多いことも明らかとなり、現場に出るまでの学びの重要性を示唆する回答もあった。今後は本結果を踏まえて授業内容を検討していくことが必要となってくる。

キーワード：保育者、ピアノ実技の力、コミュニケーション

I はじめに

「ピアノ実技」に対して不安を抱く学生は多い。卒業を目の前にした4年生の中にも、保育者として保育現場に出るにあたり、「ピアノ実技」を不安要素として挙げる学生は多い。ピアノの経験年数が短い学生のみならず、経験年数が長い学生であっても、不安を口にする現状がある。これは、実技そのものに不安があることだけでなく、実際の保育現場においてピアノを弾く際のイメージが持てずにいること、具体的にどのような力が保育現場では必要とされるのか、を捉えられていないことも関係していると推察される。

幼稚園教育要領解説の領域「表現」において、大切なことは、幼児自らが音や音楽で十分遊び、表現することの楽しさを味わうことである。そのために

は、教師がこのような幼児の音楽にかかわる活動を受け止め、認めることが大切である。(文部科学省、2008)と記述されている。また、保育所保育指針解説書には、保育士等は子どもにとって心地良い音楽、楽しめるような音楽との出会いを大切にしていかなければなりません。(厚生労働省、2008)と記述されている。保育者は、子どもたち一人一人の表現をよく見て心を寄せていくこと、子どもたちと音楽との関わりに大きな役割を果たすことが望まれている。子どもたちが歌を歌う際に保育者がピアノ伴奏をする場面考えた時に、保育者は単にピアノを弾くだけでなく、子どもたちの様子を見ながら、子どもたちの表現を受け止めながら演奏することが必要となってくる。

しかし、ピアノ実技そのものに苦手意識を持つ学生が多いことに加え、周りに子どもたちがいること

1) 教育学部子ども教育学科

を思い浮かべて演奏することは困難である、と感じている学生も多い。そのことが必要である認識はありながら、実践できていない学生の姿がある。

このような課題を解決していくために「ピアノ実技」の授業において、学生たちが確実に力をつけるために必要な要素は何か、不安なく保育現場に出ていくためには、どのような力が備わっていることが必要なのか、を検討したいと考えた。そのため、保育者に質問紙調査を行い、保育現場において「ピアノ実技」に関して必要となる、具体的な力を明らかにしたいと考えた。

II 調査方法

1 調査対象者

本学子ども学科、2014年度～2016年度卒業生のうち、卒業時に幼稚園・保育所・幼保連携型認定子ども園に就職が内定していた92名。

2 調査期間

平成29年11月に実施した。

3 調査方法

上記の92名に質問紙を郵送し実施した。依頼書、質問紙とともに返送用封筒を同封して送付した。

4 調査内容

(1) 回答者について

- ①勤務先
- ②保育経験年数
- ③現在の役職
- ④現在の担当クラス

(2) 保育現場におけるピアノ実技に関する状況

- ①ピアノを弾くか否か
- ②ピアノを弾く頻度
- ③ピアノを弾く場面
- ④1日に弾く曲数
- ⑤選曲方法
- ⑥ピアノを弾かない理由

(3) ピアノに関して保育をする上で必要と感じる度合い

- ①ピアノの技術・知識に関すること
- ②ピアノの演奏に関すること

③ピアノ実技に関するその他のこと

- (4) ピアノ実技に関して困っていること・大変だと感じること (自由記述)
- (5) 保育をする上でピアノ実技に関して思うこと・感じていること (自由記述)

5 倫理的配慮

本調査において、調査への協力は強制ではないこと、調査は無記名で行うこと、研究結果を目的以外に使用しないこと、調査対象者の個人情報保護、を誓約する文書を依頼書・質問紙とともに送付した。記入した質問紙の返送をもって調査協力に同意したものとみなすことも記載した。また、本調査を実施する上で、中部学院大学研究倫理委員会の承認を得た。(E17-0020)

III 結果と考察

質問紙調査の回答は、質問紙を郵送した92名中50名から得られた。回収率は54.9%であった。

※質問紙を郵送した92名の内、1名は宛先不明で返送されてきたため、回収率の計算においては母数を91とした。

1 回答者について

(1) 勤務先

回答者の勤務先を表1に示す。その他は、公立幼稚園、等であった。

表1 勤務先

公立幼稚園	0人 (0%)
私立幼稚園	12人 (24%)
公立保育所	7人 (14%)
民間保育所	19人 (38%)
幼保連携型認定子ども園	5人 (10%)
その他	6人 (12%)
無回答	1人 (2%)

(2) 保育経験年数

回答者の保育経験年数を表2に示す。

表2 経験年数

1年目	17人 (34%)
2年目	13人 (26%)
3年目	15人 (30%)
休職中	0人 (0%)
退職	5人 (10%)

(3) 現在の役職

回答者は上記の(2)において1年目～3年目と回答した45名である。その他は、フリー、複数担任であった。

表3 現在の役職

担任	36人 (80.0%)
副担任	6人 (13.3%)
その他	3人 (6.7%)

(4) 担当クラス

回答者は上記の(3)において担任・副担任・複数担任と回答した43名である。その他は、1・2歳児合同クラス、一時保育、であった。

表4 担当クラス

5歳児	6人 (13.9%)
4歳児	8人 (18.6%)
3歳児	10人 (23.3%)
2歳児	6人 (13.9%)
1歳児	7人 (16.3%)
0歳児	4人 (9.3%)
その他	2人 (4.7%)

2 保育現場におけるピアノに関する状況

(1) 現在、保育をする中でピアノを弾くか否か

回答者は1-(2)において、1年目・2年目・3年目と回答した45名である。77.8%が「弾く」と回答した。「弾かない」と回答した人は予想より多かった。「弾かない」理由に関しては(6)にて述べる。

表5 ピアノを弾くか否か

弾く	35人 (77.8%)
弾かない	10人 (22.2%)

(2) ピアノを弾く頻度

(1)にて「弾く」と回答した35名が回答。91.3%が「毎日」「ほぼ毎日」と回答した。ピアノを弾く機会のある保育者は、弾く頻度がかかなり高いことがわかった。その他は「行事の時のみ」であった。

表6 ピアノを弾く頻度

毎日	19人 (54.2%)
ほぼ毎日	13人 (37.1%)
週に2～3日	1人 (2.9%)
週に1日	0人 (0.0%)
月に数日	1人 (2.9%)
その他	1人 (2.9%)

(3) ピアノを弾く場面 ※複数回答可

ピアノを弾く場面に対する回答は「朝の会」が28名、「帰りの会」が25名であった。また、毎日の生活の場面だけでなく「誕生日会」「生活発表会」等、行事の際にも弾くことが多いことがわかった。今回の調査対象者は卒業後3年以内の卒業生であることから、現場に出て数年であっても様々な行事でのピアノ伴奏を担っていることもわかる。

表7 ピアノを弾く場面

朝の会	28人
給食の時間	13人
帰りの会	25人
誕生日会	23人
クリスマス会	12人
生活発表会	20人
入園式	16人
卒園式	16人
その他	9人

(4) 1日に弾く曲数

1日に弾く曲数は「3～4曲」が60.0%と最も多かった。これまでの回答と照らし合わせると、朝の会、帰りの会での曲、それぞれの季節の曲を合わせて3～4曲をほぼ毎日弾いていることが推察される。「9曲以上」「7～8曲」「5～6曲」と回答した人もおり、弾く頻度の高さに加えて1日に弾く曲数も多い実態が明らかとなった。

表8 1日に弾く曲数

1～2曲	6人 (17.1%)
3～4曲	21人 (60.0%)
5～6曲	4人 (11.4%)
7～8曲	3人 (8.6%)
9曲以上	1人 (2.9%)

(5) 選曲方法

選曲方法に関しては「園で決まっている」「園で決まっている曲と自分で決める曲の両方がある」が合わせて100%であった。弾きたい曲、自分にとって弾きやすい曲ばかりではなく、それぞれの園で決められた曲を弾くことに対応しなければならない実態がわかった。

表9 選曲方法

園で決まっている	15人 (42.9%)
自分で決めている	0人 (0.0%)
園と自分の両方がある	20人 (57.1%)
その他	0人 (0.0%)

(6) ピアノを弾かない理由

(1)にて「弾かない」と回答した10名が回答。「未満児クラスの担任であるから」が60%であった。保育所において、未満児クラスの担当になるとピアノを弾く機会がないことが多いことがわかった。その他、の回答として「弾かない方針の園のため」もあった。少数ではあるが、中には、保育者がピアノを弾くことに対して積極的でない園があることもわかった。

表10 ピアノを弾かない理由

担任を持っていないから	0人 (0%)
未満児クラスの担当であるから	6人 (60%)
他の先生が弾くから	1人 (10%)
その他	3人 (30%)

3 ピアノに関して保育をする上で必要と感じる度合い

(1) ピアノの技術・知識に関すること

ピアノの技術・知識に関して必要と感じる度合いを9項目質問したところ、「基礎的な技術」「読譜力」

の2項目は、ともに「とても必要」「ある程度必要」を合わせて98%であった。基礎的な技術やピアノを弾く際に必要となる読譜力が備わっていることの必要性を感じている保育者が多いことがわかった。特に「読譜力」は「とても必要」が48%となっており、「とても必要」の数値として全項目の中で最も高かった。自身の力で音・リズムを読み取り、曲のイメージをつかむことができることは、それまでに弾いていない新しい曲に取り組む際に必要となる力である。また、正しく読譜がなされないと、子どもたちに間違った音を伝えてしまうことにもつながる。自身のピアノ技術に関わるのみならず、子どもたちの演奏、その後も影響が出る。「とても必要」「ある程度必要」の割合が高い結果は納得がいくものである。

次いで高い項目は「必要に応じて楽譜を易しくすること」で94%、「メロディーに対して簡易伴奏を付けること」が88%であった。「楽譜通りに演奏すること」に対する回答が「とても必要」は12%と低く、「あまり必要ない」が26%であったことと照らし合わせると、保育の現場においては楽譜通りに演奏することよりも、自身の能力・状況に合わせて演奏する力が必要とされていることが推察される。前述した、ピアノを弾く頻度や1日に弾く曲数に関する結果から、常に数曲を準備し弾き続けなければならない状況があり、その状況においては対応する力の必要性を感じることは必然と思われる。それぞれの曲には本来、作曲者・編曲者の思い・意図があり、演奏者はそれらを読み取った上で演奏することが求められる。しかし、音を1部分省くことで弾きやすくなり、曲の流れを止めることなく演奏できるようになることや、跳躍する部分を減らすことでミスタッチが少なくなり安定した演奏ができるようになることがある。また、和音による簡易伴奏であっても曲の流れに影響はなく、子どもたちが歌うことそのものにも影響しない。不安なく安定して演奏できる、という視点は(2)において後述する「子どもたちの様子を見ながら演奏すること」「止まらずに最後まで演奏すること」の必要性の度合いにもつながる点である。

「あまり必要ない」の割合が高かった項目は「運指(指番号)を決める力」で46%、「必要に応じて移調して演奏すること」が38%であった。「運指を

決める力」に関しては、ピアノ経験年数が長い人の場合、考えなくても自然と指が動き、考える必要性を感じない、という状況も考えられる。また、運指を考えた上で演奏に臨む習慣がついておらず、運指に関しての意識が低いことも考えられる。ピアノを弾く上では、運指が定まっていることは安定した演奏につながり、必要な要素と思われるが、今回の調

査では、保育をする上での演奏においては必要性を感じる人が少ない現状があった。

全体では、どの項目においても「とても必要」「ある程度必要」の割合が「あまり必要ない」「全く必要ない」の割合を超えており、ピアノを弾く技術・知識に関しては多くの事柄を必要と感じていることが明らかとなった。

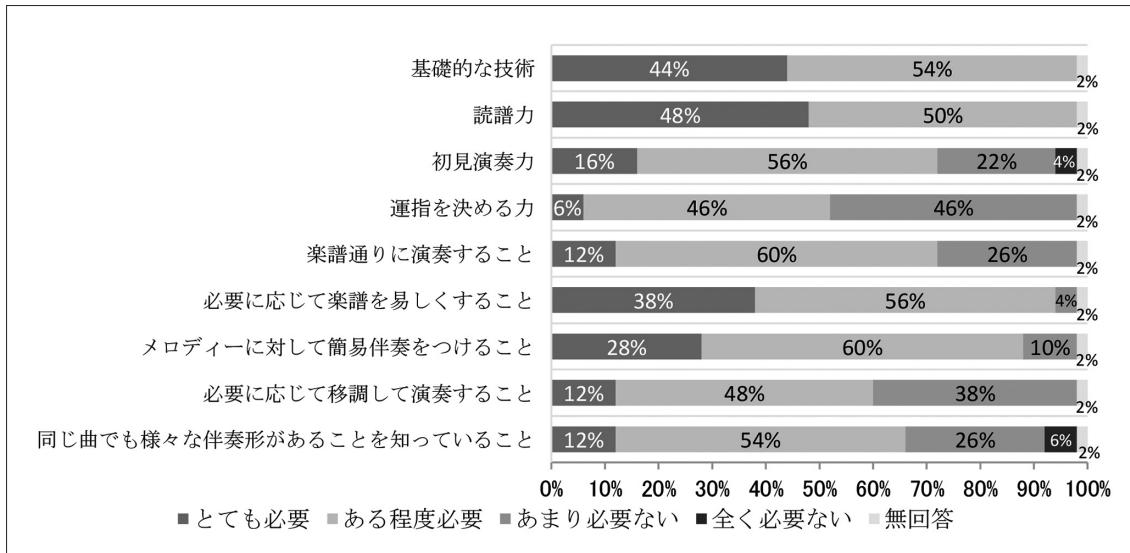


図1 保育をする上で、ピアノの技術・知識に関して必要と感じる度合い

(2) ピアノの演奏に関すること

ピアノの演奏に関して必要と感じる度合いでは「子どもの様子を見ながら演奏すること」に対して「とても必要」が66%、「ある程度必要」が34%、合わせて100%となる回答であった。全ての回答者が必要性を感じている結果となった。保育者が、自身の演奏のみに意識がいつている状況では子どもたちの表現を豊かにすることは難しい。子どもたちの表現活動を受け止め、支える役割を担っていることを常に意識して演奏できることが必要となってくる。毎日の保育の中で、それらの必要性を強く感じている保育者が多いことがわかる結果であった。ピアノの経験年数が長い人にとっても、弾き歌いをするに難しさを感じる人は多く、更に、周りにいる子どもたちに目を向けて演奏することができるようになるには、自身の演奏そのものにある程度の余裕がないと難しい。前述の(1)における「必要に応じて楽譜を易しくすること」への必要性を感じる度合いが高かったことは、この点にもつながると考えられる。

「子どもの様子を見ながら演奏すること」と並ん

で「とても必要」の割合が66%と高かった項目が「止まらずに最後まで演奏すること」「レパートリーを多く持っていること」であった。「止まらずに最後まで演奏すること」に関しては、保育者のピアノ伴奏が止まってしまうことで、子どもたちの演奏も止まってしまう状況も予想される。保育者の事情で子どもたちの活動が制限されてしまうことは望ましくない。途中で演奏ミスをして、その箇所ですべて止まってしまうのではなく、曲の流れを止めずに弾き続けられる力が保育者には必要となること、その必要性を強く感じている保育者が多いことがわかった。「レパートリーを多く持っていること」に必要性を高く感じていることは、これまでの質問に対する回答とも結びつく。1日に弾く曲数も多く、季節ごと、月ごとに歌う曲を変えていく現状を考えると、弾くことのできる曲に限りがある状態では成り立たないことがわかる。練習に充てる時間を取ることが難しい現状も推察でき、新しい曲への取り組みに時間をかけることが容易ではないことから、季節ごとの曲を通してピアノの演奏でも1年間を過ごすこ

とができるよう、現場に出る前に準備をしておくことが望ましいと思われる。

「暗譜で演奏すること」に対する回答が「あまり必要ない」「全く必要ない」を合わせて60%となっており、9項目の中で唯一「必要ない」の割合が「必要である」を超えた。保育の現場においては、演奏する際に暗譜であることはあまり求められていない

ことがわかった。しかし、「子どもたちの様子を見ながら演奏すること」を全ての回答者が必要と感じていることから、楽譜は目の前に置いてある状態であっても、楽譜のみに意識がいつている状況は好ましくないことがわかる。完全に暗譜をする必要はなくても、何か起きた時に対処ができるよう、必要な時に見る程度にとどめることが必要と思われる。

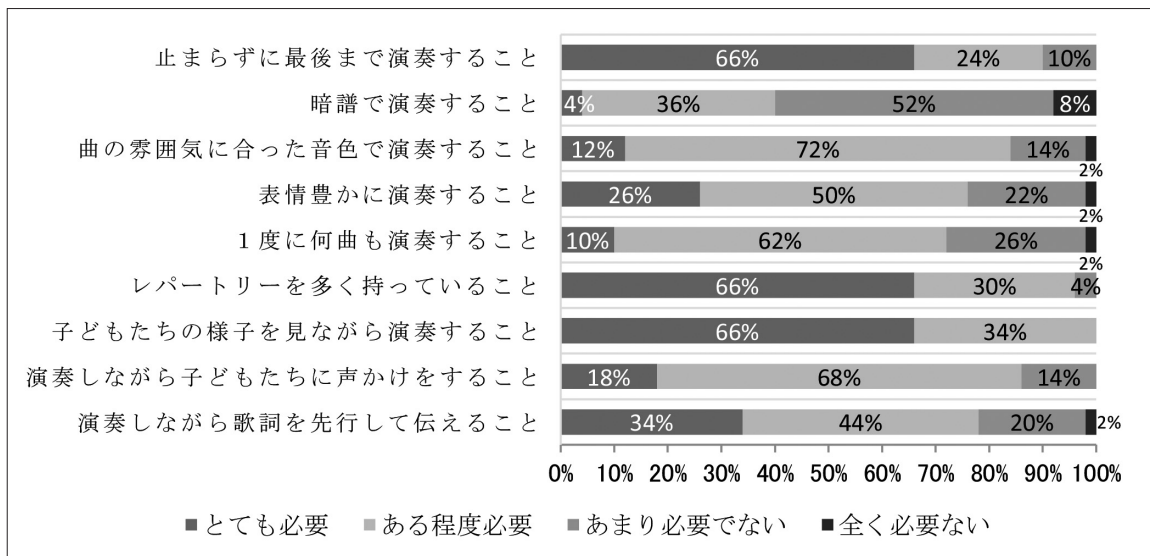


図2 保育をする上でピアノの演奏に関して必要と感じる度合い

(3) ピアノのその他に関すること

「どのような状況であっても演奏すること」「その場の状況により臨機応変に対応すること」が、ともに「とても必要」「ある程度必要」を合わせて94%であった。どちらも「とても必要」が60%以上となっており、強く必要性を感じている保育者が多いことがわかった。自分一人で弾く時とは違い、子どもたちの前で弾く状況は、毎日行うことであっても緊張感が生まれることが想像できる。2-(3)において、行事の際にも多くの保育者がピアノを弾いていることが明らかとなり、その際には、他の先生方、保護者の方々の前でも弾くことになると考えられ、緊張感は更に高まるであろう。そのような状況であっても、しっかり演奏できる力が必要、と保育者は強く感じている。「その場の状況により臨機応変に対応すること」に関しては、行事の際、子どもたちの入・退場に合わせて、曲の途中であっても曲を自然に終わらせることができること等が考えられるが、ピアノの経験年数が長い人でも簡単にできることではない。子どもたちの様子を見ながら演奏

すること、ピアノの技術・知識を持ち合わせていることが求められる。そして、やはり余裕を持って演奏できる状況でないと対応は難しいと思われる。

必要と感じる度合いが高かった他の項目は「多くの曲を知っていること」が90%であった。「レパートリーを多く持っていること」にもつながるが、たとえ弾けない曲であっても、曲そのものを多く知っていることが保育者には必要であると考えられる。

「弾き歌い曲集に載っていない曲も弾けること」は「あまり必要でない」の度合いが高く40%であった。レパートリーは多く必要だが、曲目に関しては、市販されている弾き歌い曲集の範囲で対応できる、と感じている保育者が多いことがわかった。

「音楽劇の伴奏をすること」も「あまり必要ない」「全く必要ない」を合わせて38%と全体の中では「必要ない」の度合いが高かった。これは、担任を持っている場合、子どもたちに音楽劇そのものの指導をしなければならないことから、伴奏を弾くことに関しては他の先生が担当する、という状況も考えられる。

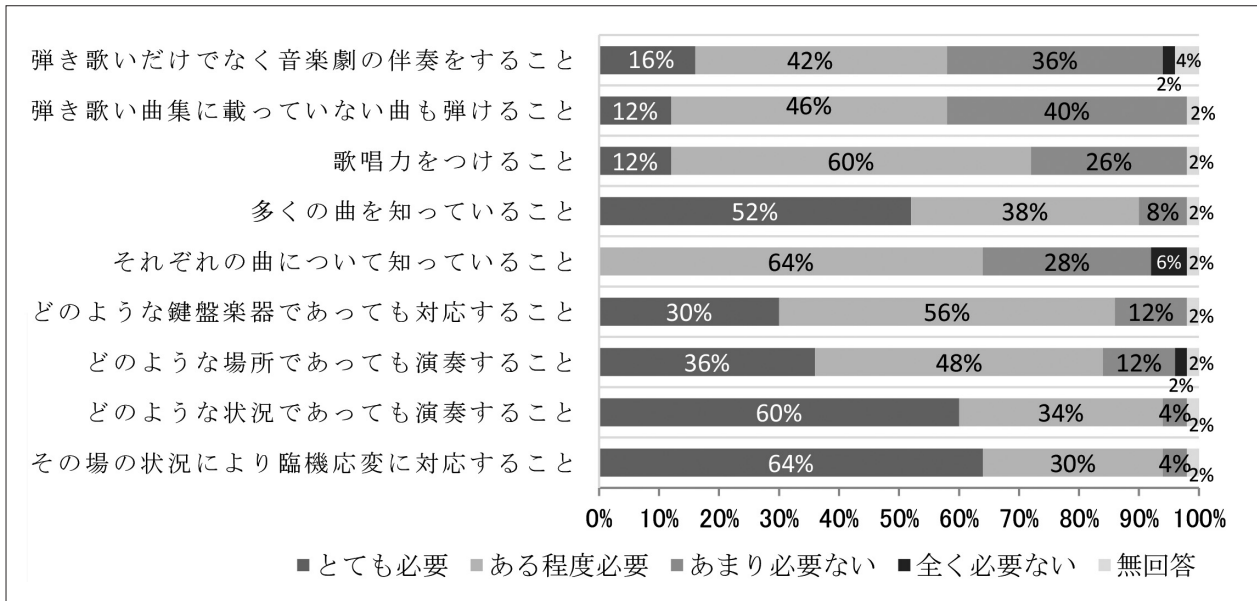


図3 保育をする上で、ピアノのその他の面で必要と感じる度合い

4 ピアノ実技に関して困っていること・大変だと感じる事

自由記述にて回答を求めたところ、42名から回答を得た。

「練習する時間を取ることができない」という回答が14件あり最も多い記述であった。日々、練習を積み重ねることの必要性を感じているが、その他の業務もあり、ピアノの練習に十分に時間を充てることができない、という葛藤が感じられる。十分に練習ができていない状態で子どもたちの前で演奏することが、ミスをする、途中で止まってしまう事態につながることも自覚している様子が伺える。また、それまでに弾いていない新しい曲に取り組む際には練習時間がより必要となる。限りがある中、練習時間を更に必要としてしまう原因になっていることを実感し「読譜力が弱いこと」を、困っていることとして併せて記述している人もあった。

「緊張して弾けなくなる」も複数あった。やはり、毎日行うことであっても、子どもたちの前でピアノを弾く際には緊張する保育者が少なからずいることが改めてわかった。緊張した状態では、自身の音を冷静に聞きながら弾くことが難しくなり、子どもたちの様子を見ながら弾くことはますます難しくなる。緊張する理由は様々であると思われるが、十分に練習ができていないことに対する不安が必要以上の緊張感を招いてしまうことも考えられる。取り除ける不安要素は事前に取り除き、自分の音、子ども

たちの声をよく聴きながら演奏できる保育者が多くなることを願う。

難しさを感じる事柄として「歌いだしの合図を出すタイミング」「歌詞を先行して伝えること」「弾きながら子どもたちに声かけをすること」の記述も多かった。3-(2)においても、必要と感じる数値は高かったが、改めて記述している保育者が多いことから、保育者として備えておきたい力の一つであることがわかる。ピアノを弾きながら同時に歌うことも難しいが、言葉をタイミング良く発することには更なる難しさがある。経験することが何より大切になると思われるが、子どもたちと演奏していることを意識し、より良い演奏になるよう努めたい、と実感している保育者が多いことは喜ばしいことである。また「久しぶりに弾いた時に指が動かなくなっており、感覚を取り戻すことに時間がかかる」という記述も見られた。これは、2-(1)において、今現在はピアノを弾かない、と回答した保育者も、担当クラスが変わった際には弾く機会もできるため、その時を思い時々練習をしていることが伺える。その時に、日々の積み重ねの大切さを実感していると思われる。

困っていること、として記述された事柄は、保育者が必要と感じている力、できるようになりたい、と願っていることでもあると思われる。子どもたちの音楽活動がより豊かになることにつながるよう、日々、意識を持ちながら経験を積んでほしいと願う。

5 保育をする上で、ピアノ実技に関して思うこと・感じていること

自由記述にて回答を求めたところ、45名から回答を得た。

「ピアノを弾くことが子どもたちとのコミュニケーションにつながる」「ピアノを通して子どもたちの表現を豊かにできる」等、子どもたちの歌の伴奏をする、という役割に留まらず、保育をする上でピアノを活用することの意義を実感している記述が多数あった。イス取りゲームをする時や、片付けをする時等、日常の活動の中でもピアノの音を出すと子どもたちの動きや表情が変わってくることを感じている保育者が多かった。それらのことから、保育者にとっては、ピアノ実技の力は備わっていた方が良く、との記述も複数あった。「ピアノを弾くことがそれほど得意でなくても務まるが、弾けると子どもたちとの関わりが深くなり、自分の保育の幅も広がる」という記述からも、ピアノが弾けることだけが保育者の資質ではないが、備えておきたい力であると感じていることがわかる。

「ピアノを弾くと喜ぶ子どもたちが多い」「ピアノの音が聞こえると近づいてくる子が多い」等の記述からもピアノを弾くことが、子どもたちとのコミュニケーションのきっかけになること、関わりを深める要素になることを実感していることがわかる。

「保育者のピアノ実技の力によって、子どもたちが歌える曲の幅が変わってきてしまう」という記述からは、子どもたちが歌いたいと望む曲を歌うことができるようにしたい、そのためには自身がその曲を弾けるようにしたい、という保育者の思いも感じられる。子どもたちの気持ちに寄り添いたいと願う姿が見えてくる。

また「子どもたちの様子に合わせて、テンポや強弱を変えることもできるので、やはりCDではなくピアノで伴奏を行いたい」「CDとは違い、楽器の生の音を聞いてもらうことができる。間違えることもあるが、子どもたちが楽しい、もっと聞きたい、歌いたい、と思う気持ちをピアノは引き出してくれる」という記述もあり、ここにも、その時その時の子どもたちの気持ち・表現に寄り添いたい、子どもたちの豊かな表現を支えたい、と願う保育者の姿が感じられる。

「学生の間にもっとピアノを練習しておけば良かった」との記述も複数あり、ピアノ実技に関しては、現場に出るまでの学びが大切であることを感じている保育者が多いこともわかった。

保育者たちが、義務感ではなく、子どもたちの感性を育て、表現を豊かにするためにピアノ実技が果たす役割があることを実感しながら、ピアノと関わり続けてほしいと願う。

IV まとめと今後の課題

今回の調査において、園により、それぞれの状況により、ピアノとの関わりに差はあったが、多くの保育者が保育をする上で「ピアノ実技の力」を必要と感じていることがわかった。必要と感じる具体的な内容、備わっていると良いと感じる力が明らかとなった。本結果を元に、具体的な実践計画を進め、授業に取り入れていきたい。「ピアノ実技の力」には、指を動かして弾くことだけでなく、読譜力、リズム練習等、様々な要素が関わってくる。ピアノ実技の授業だけでなく、音楽の他の授業と連携を取ることにも必要となってくる。1つの授業だけでなく、全体を見渡し、系統立てて授業計画を立てていくことも考えていかなくてはならない。保育現場において保育者がどのようにピアノと関わっているか、保育現場でのピアノ実技の現状について学生たちに積極的に伝えていくことにも取り組みたい。

また、本調査において、保育者が「必要」と感じる度合いの高かった項目に関して、学生たちは現在、どの程度力があると感じているか、を調査することも今後進めていきたい。足りていない力を強化することで保育現場に出る際に「ピアノ実技」に関する不安を軽減し、子どもたちとの関わりに「ピアノ実技の力」を十分に発揮できるようにしていきたい。

引用文献

- 厚生労働省 (2008), 保育所保育指針解説書, フレーベル館, P.102
文部科学省 (2008), 幼稚園教育要領解説, フレーベル館, P.165